



いとう



海援隊旗(二隻きの旗)

<https://www.ryoma-kinenkan.jp>

秋 高 SHUUKOU KISOU 気 爽

収藏品展「龍馬の評伝」展

会期：令和7年9月20日(土)～11月24日(月・祝)

【趣旨】

坂本龍馬は日本史の中で織田信長と並ぶ有名人でありながら、その功績を明確に捉えることは難しい。なぜなら、龍馬は優秀な調整役であり戦略家であるため、常に裏方として貢献しているからである。いつの時代も裏方の功績は公式記録に記載されないため、時が経てば忘れられてしまう。

そこで、本展では龍馬と面識のある同時代の人たちの龍馬評をパネルで紹介することで、龍馬の功績や実像を知ってもらいたい。同時に、龍馬評を残した人々に関連する資料を所蔵品の中から展示し、龍馬と交流のあった人々についての理解も深めていただきたい。

板垣退助の言葉

「豪放不埒、是れ龍馬の特質なり。到底吏人(役人)たるべからず。」(大町桂月著『伯爵 後藤象二郎』)



国立国会図書館ウェブサイト 近代日本人の肖像より引用

佐佐木高行の言葉

「才谷は度量も大きい、其の遣り口はすべて人の意表に出て、そして先方の機鋒を挫いてしふようにする。実に策略は甘いものであった。」(『佐佐木老公昔日談』)

陸奥宗光の言葉

「余が旧友に土佐人坂本龍馬といふ者あり、其人元來刺客にして文学を悟らず、然れども其質聡明にして其識見も亦時輩に秀出せり。(中略) 此龍馬云く、人苟も一個の志望を抱けば、常に之を進捗するの手段を図り、苟も退屈の弱気を発す可からず、仮令ひ未だ其目的を成就するに至らざるも、必ず其之に到達すべき旅中に死すべきなり、故に死生は到底之を度外に置かざる可からずと、此言一応の見解を下すときは、左迄に深意なきものに似たりと雖、精細に之を断見せば、至極の名言なり。」(『陸奥宗光遺稿』)

「薩長二藩の間を連合せしめ、土佐をもつてこれに加わり、三角同盟を作らんとしたるは、坂本の策略にして、

彼は維新史中の



国立国会図書館ウェブサイト 近代日本人の肖像より引用

魯肅(三國志の呉の軍師)なりきとは、近世史の定説なりといえども、彼は魯肅よりもさらに多くのことをなさんとしたるものなり。」(萩原延寿『陸奥宗光』)

展示では20人以上の言葉をパネルで紹介しており、ここでは特に興味深い3人の言葉を抜き出してみた。

この3人の言葉からみえてくる龍馬像は、目標を掲げれば、どのような手段を使っても成功させようとする姿である。板垣は「不埒」と言い、佐佐木は「人の意表に出る」と言っている。「不埒」の「埒」とは「囲い」という意味なので、枠にとらわれない考えを持つていたことを表している。ただし、通常は「法に外れている」や「不届き」という意味で用いるため良い評価ではないが、佐佐木の言葉と合わせて考えると、一般の人の考えとは違う考えを持ち、たとえ法に外れた方策であったとしても、目的を達成するためならば用いる人間だったと理解できる。

さらに、陸奥は龍馬を三國志の呉の軍師・魯肅に例えている。三國志の英雄的な武将ではなく軍師に例えるところに、龍馬がどのような人間だったのか見えてくる。正攻法では突破できない事柄でも、奇策を用いても突破してしまう。

このように、実際に龍馬を近くで見ってきた人でないと分からない龍馬像を展示から感じていただければ幸いです。

三浦夏樹

企画展 「半平太と京都」展 振り返り

Hanpeita and, Kyoto.

土佐出身の志士・武市半平太（文政12年（1829）〜慶応元年（1865））の没後160年を記念した、「半平太と京都」展が9月15日に無事閉幕しました。本展示では、文久2年（1862）から翌年にかけて、尊王攘夷思想のもと政治活動に奔走した半平太の京都時代にスポットライトを当てました。

半平太活躍の前提として、土佐藩山内家と都市京都の関係を紹介した第一章に始まり、文久2年8月の上洛から翌年4月の京都出立までの京都における半平太の人脈や政治活動を紹介した第二・第三章へと続きます。半平太が筆を取った書状・絵画はもとより、京都で交流した皇族・公家・他藩士ゆかりの資料、幕末期京都の市街地や土佐藩京都屋敷を描いた絵図など、計32点の資料で構成していました。熱心に鑑賞される方も多く見受けられ、中には企画展示室だけで1時間ほど費やされる方もいらっ

しゃったようです。

第二・第三章は、半平太の政治活動の成果といえる、攘夷決行を幕府に促す勅使の江戸下向とそれへの半平太の随行（文久2年10月京都出立、12月京都帰着）を境とし、基本的に時系列で扱っていたのですが、各章にはウラのテーマがありました。第二章は皇族や公家らとの交流と充実した政治活動。第三章は上洛した主君・山内容堂との相剋と苦悩。華やかな希望溢れる第二章に比べて、第三章ではのちの土佐勤王党弾圧、半平太の入牢・切腹に繋がる暗い雰囲気も漂いました。

ところで本展のポスター・チラシ（タケムラナオヤ氏作成）では、肖像画の半平太が見据える先には絵図に描かれた御所、そして容堂の書が配置され、半平太と容堂が対峙するようなデザインでした。実は展示室においても、入口から室内を見渡すと半平太肖像画と容堂書という大版で特徴的な軸物が

対置的に展示されていました。いささか分かりづらかった感が否めませんが、広報物のデザインと連動し、展示の流れやウラのテーマを象徴する一つの仕掛けでした。

武市半平太は、坂本龍馬・中岡慎太郎と並んで高知駅前「土佐三志士像」の一角を占め、県民にとっては馴染みのある人物ではないかと思いますが、県外の方への知名度という点ではもう一段の発信が必要ではないでしょうか。本企画展の展示期間は夏休みを含んでいたことで、県内外から多くのお客様に足を運んでいただくことができました。没後160年の節目に、「皇国」（天皇を戴く日本）、「御国」（土佐藩）のために宿願を追い求めて奔走した武市半平太という人物の存在を、少しでも多くの方に知っていただく機会になったのなら嬉しく思

います。

末筆ながら、貴重な資料をお貸しいただきました県内の所蔵機関の皆様にご心よりお礼申し上げます。

安岡 達仁



「半平太と京都」展の様子

「柳内良一 コレクション ― 維新史料の蒐集にかけた40年 ―」展

今年最後の企画展として、12月4日(木)から当館で始まる「柳内良一コレクション―維新史料の蒐集にかけた40年―」展。当館では、故・柳内良一氏が40年以上に渡り蒐集したコレクションを一昨年度にお引き受けし、以降、史料の整理を行ってまいりました。お引き受けした史料の中には、幕末・維新期の歴史や文化を研究する上で非常に重要となるものが多数含まれていたほか、氏の関心の一つであった大阪・天満地域に関するものなど、多種多様な史料が確認されました。本展では、これらの中から、「特筆すべき」ものを厳選した上で、一点一点を丁寧にご紹介し、魅力あるコレクションとしてこれを蘇らせます。

故・柳内良一氏は昭和28(1953)年大阪で生まれ、65歳で定年を迎えるまでのおよそ40年間、中学校の教諭や校長の立場から学校教育に携わられました。その傍ら20代前半頃から関心のある事物の歴史を調べる過程で関連資料の蒐集を始め、長年の蒐集活動の結果、現在のコレクションが出来上がりました。

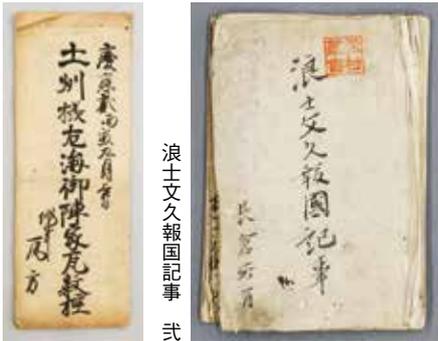
幕末・維新期の史料群の中には、新撰組隊士の回顧録や皇女和宮にかかわる記録、薩摩藩士小松帯刀宛ての書状をはじめとした著名な人物に関するもののほか、戊辰戦争関連の史料、色鮮やかな錦絵の数々、その他高札も含まれていますので、これらをテーマごとに分けてご紹介いたします。このうち、錦絵に関しては特に点数が多く、各所の名所絵のほか、戊辰戦争錦絵や西南戦争錦絵が見られます。当館ではこれまでの企画展で、度々錦絵を展示してまいりましたが、本展ではこのうち、

当館で初公開となるものを展示いたします。

当館に、そして高知県に、新たに仲間入りをする柳内良一コレクション。このようなコレクションを博物館で受け入れる意味や意義を考え、受け入れるだけでなく、これらを調査して発信していくことが、我々のミッションです。文化財はその大小にかかわらず過去・現在・未来をつなぐ唯一無二の宝物です。そのうちの一部を当館で受け入れることで、適切な環境のもと資料を保護していきながら、専門職員が調査・研究を重ね幕末・維新期の史料としての価値、そしてこれらが集まって出来たコレクションの価値をお伝えすることができます。

過去の人々を書いたもの、描いたもの、使用したものを現在に伝えていく。現在に伝わったものを未来に伝えていく。本展を通して、高知県の新しい宝物を実際に目にするとともに、蒐集家である故・柳内良一氏に思いを馳せながら、多種多様な史料そのものが持つ価値や、コレクションの魅力を知っていただけますと幸いです。

上村香乃



土州横左海御陣屋瓦数控

浪士文久報国記事 貳



山陰道鎮撫総督西園寺卿所用馬杓

ここは館長の部屋

吉村 大

後半のスタートです

まさしく「酷暑」であったシーズンを経て、今年も早いもので後半期スタートの10月を迎えました。

本年は坂本龍馬生誕190周年ですので、これを記念する展示事業として現在、先月20日から「龍馬の評伝」展を開催し、11月の「龍馬月間」中の11/24(月・祝)を会期末としています。

龍馬は時代を先取りする慧眼を持ち、慶応2(1866)年1月の薩長同盟により近いうちに幕府が倒れ、幕府に代わる合議体制の世の中が来ることを想定していました。

そして幕藩体制という、政権の多重構造の限界を悟り、一刻も早く諸外国に並び立つような先進国家を創らねばと、武家政権の交代、いわゆる「大政奉還(＝倒幕)」と、それとのセットで交代後の「新政府の樹立」という大仕事を構想し、その実現のために奔走しました。

最晩年の慶応3(1867)年11月には、幕末日本再建の道筋を「新政府綱領八策」に明示し、さらに、大政奉還後の旧幕府側との武力衝突を見越した戦費調達のための「紙幣の発行」や、激情に駆られた同衝突の回避も意図して、龍馬率いる海援隊が運航する船で、国々の浪士たちを北海道に移住させ開拓をさせる「蝦夷地の開拓」をも構想し、それぞれ具体の対策を講じようとしていました。

このように龍馬は先見の明をもって周到に、時勢を取束させるための大胆かつ緻密な計略を積み上げる人物なのであります。

「龍馬の評伝」展では、実際に龍馬と交流のあった同時代の要人や同志らの龍馬を巡る証言と歴史資料を紹介していきますので、これらを通して龍馬の本領に接していただければと念じています。



「坂本龍馬の生涯と幕末」 土佐弁特別音声ガイドのご紹介

坂本龍馬生誕190年を記念した、特別音声ガイドを9月20日からスタートしました。常設展示室「坂本龍馬の生涯と幕末」の展示資料から厳選した資料を、龍馬の目線で紹介します。当館学芸員が新たに制作したシナリオで、まるで龍馬が隣にいて解説をしてくれるような気持ちで展示をご覧ください。

ナレーションは、「僕のヒーローアカデミア」The “Ultra” Stage（主演・緑谷出久役）や、ミュージカル「刀剣乱舞」（陸奥守吉行役）など多数の作品に出演している俳優・田村心さんに担当いただきました。田村さんの土佐弁も必聴です！

こちらの音声ガイドは令和8年3月31日までの期間限定での貸出となります。ご来館の際は是非ご利用ください！

常設展示室「坂本龍馬の生涯と幕末」土佐弁特別音声ガイド

◆期間：令和7年9月20日(土)～令和8年3月31日(火)

貸出除外日：12月11日(木)～18日(木)、12月22日(月)、12月27日(土)～1月1日(木)

貸出料金：500円(税込) ※別途入館料が必要です。

◆ナレーション：田村心(たむらしん)

プロフィール

田村心(たむらしん)

1995年10月24日生まれ、東京都出身。

2016年俳優として本格デビュー。

「僕のヒーローアカデミア」The “Ultra” Stage(主演・緑谷出久役)、ミュージカル『刀剣乱舞』(陸奥守吉行役)など多数の2.5次元作品に出演。

近年では堤幸彦監督演出の舞台「巖流島」、舞台「西遊記」、ドラマ「Sugar Sugar Honey」など、2.5次元作品以外の舞台・ドラマ・映画にも出演し幅を広げている。



◆音声ガイド収録資料(一部)

嘉永6(1853)年3月 坂本八平直足書「修行中心得大意」(複製)

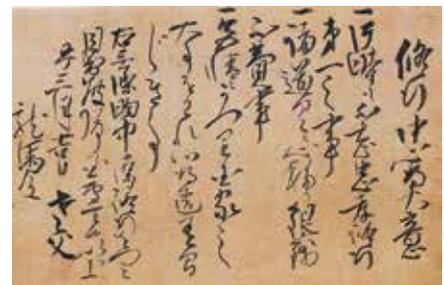
龍馬の父・八平が、嘉永6(1853)年、剣術修業の旅に出る19歳の龍馬に手渡したものの。

〈真物：京都国立博物館所蔵(国指定重要文化財)〉

陸奥守吉行 日本刀

龍馬の「吉行」と同じ作者の刀。京都近江屋で龍馬が刺客に襲われた時、床の間から取った刀が「吉行」で、現在は京都国立博物館に所蔵されている。

〈小美濃清明氏寄贈〉



竹田 綾

令和六年度企画展「天誅—土佐藩の奔走」展 記念講演会

「幕末期土佐藩と「人斬り」 —政治行動と政治空間への視角—

京都産業大学文化学部 准教授 笹部 昌利氏



講演される笹部氏

はじめに

幕末期には、大名による暫定的な政治主導が恒常化した。大名に随従する「志士」たちによる処士横議や横議横行を受けて、藩政は機構整備を迫られた。また、武家人口の増加や火災・殺人などによる混乱など、幕末京都は異常性を帯びた地であった。本講演では、これら従前の幕末維新史では問われなかった事柄の意味を考えたい。

1 幕末政治と土佐藩山内家

嘉永六年（一八五三）ペリー来航を受けて、阿部正弘政権は挙国一致を掲げ、幅広い身分の人々に政治諮問をおこなった。これにより大名の政治意識が向上し、土佐藩山内豊信も幕政参加の志向性を高めた。

阿部の死後、井伊直弼政権のもと隠居

を強いられた豊信（のち容堂）が、安政五年（一八五八）に再度抜擢されたのが吉田東洋である。東洋は、参政として教育機構構築と法整備に基づく藩政改革を進めた。

一方、文久元年（一八六一）に武市半平太らが有志盟約書を起草した。そこで建前とされたのが、天皇の「大御心」や「老公の御志」であった。従来、身分的制約から政治に関与できなかった者たちの政治志向は、国事に関心を寄せる容堂の存在に依存していた。

2 政治手段としての「人斬り」

「人斬り」が政治の活路になるためのモデルケースを提供したのが、安政七年（一八六〇）三月の桜田門外の変であった。政治的障害を殺人によって消し去るという手法、その大義として「天」の存在を設定し、「斬奸趣意書」によって「人斬り」を正当化する動きはその後に引き継がれていく。

土佐藩でも文久二年（一六六二）四月、吉田東洋が暗殺された。武市らが主導したとされ、「斬奸趣意書」は井伊大老のものと同様である。その結果、藩要路には門閥譜代層が復帰し、当局の人事は刷新された。時を同じく政治復帰を果たした容堂は、武市らを藩外交の前線に配備するとともに、目付役・下横目を江戸や上方に駐在させ、自らを頂点に藩士監視と政治情報収集の体制を構築していった。このようなシステムのもと、江戸・上方・国元の間では書面による政情報告・政務管理がなされた。「土佐藩京都藩邸史料」に多数見られる「御用状」には、勤王党員が監視される有様や立身出世

を遂げる武市への疑念・妬みや嫉みといった事柄も記される。武市らの政治積極化に比例して、目付の監査厳格化が進んでいく。

3 京の「人斬り」

—「志士」の集う「場」、

「天誅」横行の場—

幕末期京都では、放火を含む火事が連続するような異常性が現出しており、「天誅」もその一つとして位置づけられる。文久二年七月の島田左近殺害・梟首を端緒に、天誅事件が相次いだ。こうした異常事態が日常化していったことは、天誅事件を描いた図絵が文久三年以降、大きく減少していることに象徴されているのではないか。

事件の現場となった木屋町・河原町の近辺には、京都一の交通量を誇った三条大橋が存在し、「かわら」は中世来、猥雑さを持つ場でもあった。天誅事件は、①繁華なロケーション（土地の猥雑性）、②精巧な情報網（用達商人との連携）のもと、③絶対的な政治悪を対象とした事件であった。「正義」の名のもと、第三者の意識に作用することを狙い「人斬り」を手段とした、政治運動の一形態といえる。

むすびに

「天誅」は幕末期の政治手段として暫定的に出現した。その背景として、土佐勤王党の政治的出現とこれを誘発した山内容堂による国政参加の存在を再度強調しておきたい。

令和七年度企画展「幕末維新期の写真」展 記念講演会

古写真が語る歴史

「この人は誰？」から始まる時間旅行

大東文化大学外国語学部講師
渋谷龍馬会共同会長

倉持 基氏

一枚が学界に論争を巻き起こし、市民の歴史観にまで影響を与える点は、まさに写真史料の持つ力を示すものです。

さらに古写真は、当時の社会や文化を映す鏡でもあります。刀を帯びず丁髷を結わずに撮影された武士の肖像からは、身分制度の変容や西洋化の影響を読み取ることができ、外国人写真師の活動からは、国際交流の実態が見えてきます。写真は「真実を写す」ものではなく「時代の断片を切り取る」媒体であり、その点にこそ史料の価値があるので。



講演される倉持氏

幕末維新期から明治にかけて撮影された古写真は、近年、従来以上に重要な歴史資料として注目されています。これまで歴史研究の中心は文字史料に置かれ、写真はしばしば補助的な扱いにとどまってきました。しかし、デジタル化に

よって細部の分析が可能となり、網羅的に収集・比較することで、古写真から新たな歴史像を描き出す試みが進んでいます。私はこうした研究を「歴史写真学」と呼び、視覚情報を分野横断的に読み解くことで、文献史学とは異なる成果を得られると考えています。

講演ではまず、19世紀ヨーロッパにおける写真技術の誕生から発展までを概観しました。ダゲレオタイプ（銀板写真）や湿板写真の登場は、肖像や風景を鮮明に残すことを可能にし、視覚文化のあり方を大きく変えました。その後、写真には世界各地に広まり、日本にも幕末の開国を契機に伝わり、薩摩藩による最

初期の撮影を経て、横浜や長崎では営業写真館が開かれ、写真文化は急速に普及していきました。

この過程で、日本写真の開祖とされる長崎の上野彦馬と横浜の下岡蓮杖が登場します。上野彦馬は化学者として科学的・記録的な写真を追求め、坂本龍馬の肖像写真や西南戦争の戦跡写真を残しました（龍馬の肖像写真については、門人の井上俊三が撮影に関わったとする説もあります）。一方、絵師出身の下岡蓮杖は背景画や演出を工夫し、外国人観光客向けの娯楽的な写真を生み出しました。両者は直接会うことはありませんでしたが、その後継者によって科学的リアリティ

と芸術的演出が融合し、日本独自の写真文化が形づくられました。こうした動きは、明治以降の日本が「記録」と「表現」を両立させる映像文化を育んでいく大きな契機ともなりました。

古写真はまた、人物同定の手がかりともなります。たとえば「フルベッキ写真」と呼ばれる集合写真には、坂本龍馬や西郷隆盛らが写っているとされ、真偽をめぐる議論が繰り返されてきました。私は、顔貌比較に加え、撮影技術や当時の写真館の状況、湿板の痕跡などを総合的に分析し、既存の説を検証してきました。こうした作業は新しい知見をもたらすし、歴史像の補強や修正に直結します。写真

古写真を歴史研究に積極的に取り入れることは、文字資料では見えにくい人々の表情や生活文化を再発見する営みです。幕末維新という大きな転換期を写し撮った写真群を読み解くことは、歴史の理解を深めるだけでなく、未来を考えるうえでも意義深いものといえます。今後も「歴史写真学」の視点を広げること、古写真は過去の記録にとどまらず、現代に問いを投げかける生きた史料であり続けるでしょう。

総会・研究発表会

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会は六月四日、坂本龍馬記念館新館ホールにおいて、第一七回総会・研究発表会を開催した。

昨年同様、総会では書面決議が行われ、昨年度事業報告、今年度事業計画、役員案とも承認された。その後開催された研究発表会では、三名の会員による研究報告がなされた。いずれもこれまでの調査・研究に基づいた興味深いご報告で、盛会のうちに今年度総会・研究発表会は閉幕した。



総会の様子

【テーマ】

「龍馬研究の水準を高め、

龍馬の真実を追究し、その精神を現代に生かそう」

【日時】

二〇二五年六月一四日（土） 一〇時～一六時

【会場】

高知県立坂本龍馬記念館 新館ホール

【当日次第】

● 一〇時

・総会（書面決議報告）

● 一〇時二五分

・会長挨拶

・来賓挨拶

・高知県教育長

・高知市教育次長

● 一〇時三〇分

・第一部 研究発表会

「河田小龍研究最前線―2回の展覧会を経て―」

河村章代氏

（公財）高知県文化財団総務部アートコーディネーター（学芸員）

● 一三時

・第二部 研究発表会①

「土佐藩京都藩邸史料

―伏見奉行所報告から考える寺田屋事件―」

上村 香乃（高知県立坂本龍馬記念館学芸員）

・第二部 研究発表会②

「吉田東洋が追求した、海南政典「格式制度改革」とその思想」

網屋 喜行氏（鹿児島県立短期大学名誉教授・吉田本家末裔）

※当日の発表内容は、次期論集にて公表いたします。

【総会書面決議のご報告】

二〇二五年年度の事業計画や予算等の総会審議事項については、事前に書面決議を行いました。その結果は次の通りです。

・会員数 八六名

・第一号議案（一）（二）（三）

承認 六二名 回答なし

二〇名

・第二号議案（一）（二）

承認 六二名 回答なし

二〇名

・第三号議案

承認 六二名 回答なし

二〇名

以上により規約第九条（議決）に基づき、すべての議案について、過半数の承認をもって可決されましたことをご報告いたします。

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会

こぼれ話 ― 犬歩棒当記 (五十五) ― 龍馬の晴れの日

宮川 禎一

坂本龍馬が慶応二年十二月四日に長崎で書いて土佐の家族に送った長い手紙がある。同年一月二十四日未明に伏見の寺田屋で幕吏に襲われて命からがら脱出した経緯が詳細に記されている。そこに興味深いことが書いてある。伏見の薩摩屋敷に匿われていた龍馬と三吉慎蔵が二月一日に薩摩藩の吉井幸助の指揮する兵士六十人もの厳重な護衛とともに伏見から京都二本松の薩摩藩邸まで籠で運ばれる場面の記述だ。原文の漢字を多少ひらがなに戻した。

この時伏見奉行よりも打取れなどのしりしりしなれども、大乱にも及ぶべしとてそのままに相成候よし。実に盛なる事にて有之候。私ハ是より少々かたハにハなりたれども、一生の晴にて有之候。

怪我をした坂本龍馬は籠の中で薩摩屋敷を包囲監視していた伏見奉行所の役人が発する「お尋ね者の坂本と長州人はやはりここに居るか」討ち取れ!」という罵声を聞いたのだ。しかし薩摩藩の洋式歩兵を前に「大乱にも及ぶ可能性があったため」に奉行所(幕府)はまったく手が出せず、罵るのがせいぜい

だったのだ。

この時の龍馬の気持ちを補って復元すれば「たかが脱藩浪人の俺様をめぐって伏見奉行所と薩摩藩が大喧嘩して良い流れだ。これで薩摩藩が幕府方に戻ることは無くなった。薩摩は必ず長州藩を助けるはずだ。それもこれもこの俺様のせいだ。今日こそが生涯の晴れの日だなあ」であろう。龍馬の自己評価である。

一月二十一日の薩長会談での「口約束」などという「不安定なとりきめ」を確固にしたのは寺田屋で龍馬が襲われて伏見の薩摩屋敷に匿われ、さらには京都へと護送された一連の大騒ぎ(実に盛んなる事)が主な原因だ。この慶応二年二月一日をもって薩長同盟の真の成立日とするのが筆者と龍馬の個人的な見解である。



現在の寺田屋。京都市伏見区

東京に先祖の墓を訪ねて

〔前編〕〔中編〕につづき、〔後編〕をお届けいたします。

〔後編〕



小島 一男 (執筆者)

ぬように脱走兵扱いとするよう懇願し、別れの盃を交わす。彼らの死後、土佐藩は四人を脱走兵扱いにはせず、墓石には高知藩と深々と刻印されていた。

翌日夕間を待つて川を渡り、復讐を警戒する築地の大聖寺藩の陣屋裏手から襲った。番兵十数人を殺傷し、その夜の明けぬうちに四人揃って腹を切ったという。ちなみに四人と別れの盃を交わした北村長兵衛は、鳥羽伏見の戦い、勃発時、土佐藩の参戦を待たずして薩長の陣営に加わり、砲隊長として東北に転戦した豪の者であったという。谷干城とは無二の親友であった。

鳥羽伏見の戦いで加賀本藩は、当初幕府側として出陣するが、幕府軍の敗北を知り帰陣、官軍に恭順した。これをみて支藩の大聖寺藩も慌てて新政府に帰順したのである。この後官軍として戊辰戦争に従軍したものの、元々は賊軍であるとのレッテルが貼られたままであった。戊辰戦争の余燼がくすぶっていたこの時期、土佐・加賀両藩の関係は、ちよつとした小競り合いで

も深刻な争いとなる要素ははらんでいたのである。ましてや官軍の勇者である一行を、横柄な態度で接した大聖寺藩の兵士を許すことができなかったのだ。

墓前で、洋行かなわず無念であったでござりましようと言いつつ、土佐の酒を供えて、私も頂戴しました。吉松由宇子氏が、桂浜で拾い集めた五色石を墓前に供え、土佐の香を届けたのである。ふと気が付くと、彼らを見守る観音像の優しいお顔があった。それにしても墓石の損傷が激しかった。このように風化するのだからと考えていると、そばに立ち会ってくれた住職の御母堂が「昭和二十年の空襲によりこのような姿になったとのことです」との話であった。(完)



小島捨蔵の墓前での執筆者

龍馬の手紙

28

木戸本の伝来

宮内庁書陵部図書課図書寮文庫所蔵資料の一つに、坂本龍馬記念館ともゆかりの深い「薩長同盟裏書」がある。木戸孝允が坂本龍馬に宛てた書状の返信として裏に書き送ったものであり、もとは木戸家旧蔵資料である。当部の家別け書籍群で「木戸本」と称する一群が当部蔵となった経緯について、当時の公文書類等をもとに、簡単であるがまとめてみたい。

木戸本の根幹は昭和二年刊行の『松菊木戸公伝』の編纂資料として収集されたものであり、刊行後に木戸家において孝允を中心とした主要な資料が選択整理された。各巻一〜数点文書を巻物に仕立てており、内訳は、天（六三三巻）、地（八四巻）、人（二四四巻）、番外（七巻）の部に分けた三九八巻、他に孝允を中心とした家庭文書他の七四点、加えて文書類の一四三点が木戸本の総体

である。天、地、番外は主に孝允自筆で、その多くは日本史籍協会叢書の『木戸孝允文書』に収録、人は三条実美、岩倉具視、西郷隆盛、大久保利通等、維新諸名家の自筆書状を収めている。「薩長同盟裏書」は、このうち、天四七である。

昭和二十一年、木戸家から宮内省に寄贈の意向があり、天地人及び番外の三九八巻は献上、家庭文書他は木戸家で保存、文書類は当部の前身である図書寮に寄贈することとなった。同年十月一日に十数点が昭和天皇の天覧に供され、芝葛盛宮内省御用掛による「侯爵木戸家献上本幕末維新関係文書に就て」と題した御進講も行われた。その後、昭和三十六年には献上の天地人及び番外の三九八巻は書陵部に下附、また、同年に家庭文書他の七四点（うち、尺牘二三巻は「特」の部として分立）も木戸家より寄贈を受け、以後は一括して当部において保存、現在に至っている。各文書は「書陵部所蔵資料目録・画像公開システム」に登録されており、画像公開も進めている。

田代圭一
（宮内庁書陵部図書課図書寮文庫 首席研究官）

龍馬館の あの日 あの日 あの日



龍馬館の歴史や普段見ることがない龍馬館の一面を写真とともにご紹介するコーナーです。No.5

心をつないだあの日

2012年から2016年まで行ったイベント「レッツゴー！ハンドインハンド」は、開館20周年（2011）に建てられた坂本龍馬記念館のシェイクハンド龍馬像1歳の誕生を祝うために始まったイベントで、桂浜にある龍馬像との間を参加者の握手でつなぐというもの。最後となった2016年11月13日開催の「ハンドインハンド～感謝を込めて」では、シェイクハンド龍馬像を起点・終点として、記念館（当時は本館のみ）の館内を参加者の皆様の手でつないだ。2018年のリニューアルオープン



第1回(2012年11月18日)の様子



2016年11月13日開催の起点・終点

に向けて、工事が進んでいる箇所もあり、規模を縮小したのだ。次年度は休館ということもあり、少し特別な思いもあった。

時間が迫るなか、館内外を走り回り、手のつながりをスタッフで確認した。ご協力いただいた皆様と目標に向かってひとつとなった時、手をつなぐだけでなく感謝を込めて心もつなぐ、そんな瞬間だった。

その後のセレモニーでは「桂浜・龍馬プロジェクトぜよ！」による、よさこい鳴子踊りの演舞や、龍馬グッズが当たる抽選会。当日はお祭りをイメージして「お面屋さん」や「射的」をご用意し、演劇公演やオカリナコンサート、龍馬にちなんだ香りを楽しむ香道など、龍馬づくしで楽しんでいただいた。

今の時代は、皆で手をつなぐイベントなどは考えられないのかもしれない。しかし、つないだ瞬間の「一体感」や「ぬくもり」を、いつかまたこの場所で体感できる日がくれば良いと思う。

宮崎 圭子

高知県立坂本龍馬記念館では、教育普及事業の一環として毎年夏季休暇の時期になると「りようま館の夏休み」と題した様々なイベントを催している。本稿では、今年度に筆者が講師を務めた「江戸時代のおもちゃ『ずぼんぼ』をつくってあそぼうー」について記す。

まず、ずぼんぼという玩具について、明治四四年（一九一）に出版された『うないのとも』を元に説明する。「うない」とは子供のことであり、『うないのとも』は子供の玩具を挿絵付きで説明した本である。以下、『うないのとも』三巻からの引用である。原文には適宜訓読を加え、判読不能箇所は「□」と表記した。

此玩具ハ天保年頃より行る、獅子或いハ□^(鯛カ)など躰にて製、四足の所へ蛸貝を付る、団扇にて、ずぼんぼへくずぼんぼはらたちやつらにくやいけのどんがめならバさ、の相手に

いたしますと書いてあをげは、□然に活動して奥ある玩具なり、

ずぼんぼとは天保年間（一八三一～一八四五）頃に作成された玩具である。獅子舞などを模した見た目をしており、四足には錘としてシジミが付けられている。大抵の場合は獅子舞と虎の姿をした物が作られ、明治期に発行された『寺社境内名物集』によると浅草雷門内では売り物として扱われているようである。

遊び方としては、上記引用資料にあるように「ずぼんぼえ」と呼ばれる上方の座敷歌を歌いながら団扇で仰ぎ、飛ばして楽しむのが一般的である。ただし、これには地域差があるようで、明治31年（一八九八）刊行『風俗画報』156号によると、広島の方では亀の形をした玩具を十四、五人で取り囲み団扇で煽いで吹き寄せられた者が負けという「ゾボンボ遊び」が「四五年以前より」流行していたという。

さて、このずぼんぼというのは、紙でできているためハサミとノリさえあれば簡単に作る事ができる。小学生であれば一人で容易

に作れるが、博物館のイベントのため、玩具の歴史や変遷についての説明も行う必要がある。できる限り史料そのままを見ていただきたいため、史料の画像と上記のような翻刻文を何点か載せたレジューム・パワーポイントを用意し、それを元に説明を行うこととした。

参加者の大半は子供たちで、中には幼稚園の年少さんも混ざっていた。参加者は説明を聞きつつペラペラとページをめくっていたものの、現代語訳は口頭のみでありどこまで理解できていたかは不明であった。

工作終了後、とある保護者が子供に対し「昔のずぼんぼはどうやって蛸を付けてたんだっけ？」と質問しているところを見かけた。その子供は小学校低学年のように見えたが、迷うことなく「めしつぶ」と答えていた。子供の理解度の高さに思わず驚いた。



右ずぼんぼ 『うないのとも』三巻 国立国会図書館蔵

博物館に展示されている古文書の子供たちがじっくりと見ることは少ない。当館の場合でも、史料中心の新館から映像メインの本館へすぐに流れて行ってしまっている。展示解説に参加してくれる子も極まれにいるが、どうしても大人の割合が高いため子供にとっては難しい説明となってしまう。今回行ったイベントでの子供たちの理解度を踏まえ、今後も古文書を見る機会を作っていきたい。

ミュージアムショップ便り

本館出口に位置するミュージアムショップでは、龍馬に関する様々なグッズを始め、年間を通して開催される講演会や企画展関連の商品等を揃えて皆様をお待ちしております。
今回は、長年販売されている人気商品「缶バッジ」と、特別価格となった「龍馬マウスカバー」をご紹介します。

ぜよバッジ、家紋バッジ、龍馬バッジ、龍馬マウスカバーのご紹介

今月で放送が終了するNHKの朝ドラ『あんぱん』では「たまるか」や「ほいたらね」という土佐弁が話題となっています。2010年の大河ドラマ『龍馬伝』では、福山雅治さん演じる坂本龍馬のセリフの語尾に「ぜよ」がつけられ話題となりました。お客様からは「高知の人は、～ぜよと本当に言うのですか。」とよく質問されました。

そんな中、話題になった「ぜよ」を使った商品として、缶バッジ、ミラー、トートバッグを販売する事になりました。

特に缶バッジの「**ぜよバッジ**」は、有名旅行雑誌に取り上げられ、「これこれ」と言いながら、連日お買い求めのお客様が殺到する程の大ヒット商品となり、15年経った今も人気商品として販売されています。

缶バッジの大きさは32mm。色は9色あり、それぞれのカラーは、「桂浜ぜよ、夜明けぜよ、カツオぜよ、文旦ぜよ、高知の空ぜよ、ベリーぜよ、ミントぜよ、Ryomaぜよ、ブドウぜよ」とイメージされています。
価格は1個220円です。

缶バッジは他にもあって、「**家紋バッジ**」と「**龍馬バッジ**」が販売中です。
缶バッジの大きさは家紋は32mm。色は7色あり、坂本家の家紋「組合角に桔梗紋」のデザインです。龍馬は少し大きく38mm。

どちらも価格は1個200円です。

こちらも「ぜよバッジ」に負けず劣らずの人気商品です。

坂本龍馬記念館オリジナルの缶バッジ、お土産にはもちろんですが、全種類のコンプリートを目指してみてもはいかがでしょうか。

最後に、お得な情報です！

龍馬マウスカバーの販売価格を変更しました。
柄は、坂本家の家紋と龍馬のサインの2種類です。
1枚1200円から半額の1枚600円に。
特別価格です。
ぜひこの機会をお見逃しなく。

渡辺 曜子



220円(税込)



200円(税込)



~~1,200円~~ → 600円(税込)

■「海に見える・ぎゃらりい」

海に見える・ぎゃらりいから眺めることができる青々とした太平洋から視線を少し横に移動させると、高知灯台の白い頭が見えることにお気づきでしょうか。

高知灯台は、明治16(1883)年、高知県で初めて設置・点灯された灯台として知られています。当初は、竜頭崎灯台の名称で浦戸の竜頭崎に設置されていましたが、戦後、海上保安庁に移管された後に現在の高知灯台へと名称が変更になり、昭和46(1971)年春には全面的に改築され、現在の位置に移設されました。

現在、我々が一般的に目にする灯台は洋式灯台と呼ばれ、日本にこれが導入されたのは、今から約160年前、幕末の頃です。灯台設置のきっかけは、攘夷を実行するために長州藩が米・仏・蘭の船を砲撃した報復として、米・仏・蘭に英を加えた四か国が、下関砲台を攻撃した事件(四国艦隊下関砲撃事件)にあります。これに敗北した長州藩は多額の賠償金を支払うこととなりますが、慶応2(1866)年には賠償金の減免と引き換えに上記の四か国と12か条の改税約書(江戸条約)が結ばれます。この11条目に定められたのが、灯台の設置でした。

江戸条約の締結により、8つの灯台の設置が取り決められます。このうち、現在の和歌山県の南端に位置する潮岬に建設が予定された灯台については、土佐藩と少しかかわりがあることで知られています。

慶応2年7月、英国の測量船であるセンベルトが潮岬灯台の建設のため調査に訪れます。その巡航途中、天地浦(現在の高知県幡多郡大月町)に渡来し、3日後には浦戸沖に停泊しました。英船の渡来について、当時の土佐藩主であった山内豊範は大坂表の老中と江戸の老中に届け出ています。嘉永7(1854)年、大坂に露船が渡来した際にも当該地域の人々が幕府への届け出を行っていたことから、異国船の渡来報告は慣習であったと考えられます。

しかし、開国・開港を経て異国船の渡来が頻発するようになった後も藩主からの届け出が行われていた点は、非常に興味深く感じられます。

届書の中には、天地浦から浦戸沖へ移動する際に須崎へも立ち寄って測量を行ったこと、浦戸沖へ船を停泊させた後に小舟で浦戸湊まで乗り入れてきたことなどが詳しく記されています。

上村 香乃



入館状況

2025年9月20日現在

(1991年11月15日開館以来 33年310日)

◆入館者数 4,810,577人

■リニューアルオープン(2018年4月21日)以来 873,817人

編集後記

文久2年、念願かなって上洛を果たした武市半平太は、妻・富に宛てた閏8月6日付書状を「冷気二移り、暮しよく候処」という文言で書き出しています。この日付を新暦に変換すると1862年9月29日になり、本号発行(10月1日)の頃の季節感を反映したとも言えます。半平太は晴渡る空と爽快な空気のもと、初秋の京都を奔走し始めるのです。

猛暑の夏が過ぎ去り、「暮しよ」い秋がやってきます。半平太のように夢に向かってまい進する季節にしたいものです。(や)

館だより“飛騰”第135号(年4回発行)表紙題字:書家 沢田 明子氏

発行日 2025(令和7)年10月1日

発行 公益財団法人高知県文化財団
高知県立坂本龍馬記念館

〒781-0262 高知市浦戸城山830

TEL (088)841-0001 FAX (088)841-0015

http://www.ryoma-kinenkan.jp

「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間 9:00~17:00 年中無休

入館料 一般500円(企画展開催時900円)

高校生以下無料

高知県・高知市長寿手帳所持者、療育手帳・身体障害者手帳・精神障害者保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者(1名)は無料



「飛騰」は郵送料のみのご負担でお届けいたします。購読希望の方は140円切手をご希望回数(4回分まで)お送りください。

〒781-0262 高知市浦戸城山830 高知県立坂本龍馬記念館「飛騰」購読係 まで